

災害の記憶 伝承誓う



3・11メモリアルネットワーク(石巻市)

被災地結び力を結集

東日本大震災の出来事と教訓を未来へどう伝え継ぐか。益社団法人「みらいサポート」宮城県最大の被災地、石巻市に拠点を置く民間連携組織「3・11メモリアルネットワーク」は、2万人を超す死者・行方不明者(関連死を含む)が出た震災の伝承をテーマに、草の根の活動をつなぐ。積み上げる取り組みに挑む。

「被災地や遺族、語り部らと結び、力を結集して未来の伝承の会」の遺族らが参加する。

その後、陸前高田市やいわき市のNPOなども含め被災3県をつなぐ形で組織を強化し、登録は個人390人、69団体(2月現在)に上る。

「震災直後から個人、団体でいくため、若い世代を活動の輪に積極的に組み込む取組みやメンバーが被災地を訪れ学びを深める活動には力を入れる」。

2月17日、震災遺構に指定された宮城県山元町の旧中浜小で、被災当時の同小学校長井上剛さん(61)は「山元町は過去にも津波被害があり、教訓を伝える石碑もあった。だが、震災でまた犠牲を繰り返してしまっている。被災者である私たちが伝承の意義を再確認しなくてはならない」と問い掛けを込める。

「当事者から被災現場で過酷な体験を聞くというのは活動の柱となるのは、被災地各地で取り組まれている伝承活動の連携・伝承活動の企画・共有の伝承の担い手となる人材の育成」だ。

特に次世代へ震災を語り継いでいくため、若い世代を活動の輪に積極的に組み込む取組みやメンバーが被災地を訪れ学びを深める活動には力を入れる。

2月17日、震災遺構に指定された宮城県山元町の旧中浜小で、被災当時の同小学校長井上剛さん(61)は「山元町は過去にも津波被害があり、教訓を伝える石碑もあった。だが、震災でまた犠牲を繰り返してしまっている。被災者である私たちが伝承の意義を再確認しなくてはならない」と問い掛けを込める。

「当事者から被災現場で過酷な体験を聞くというのは活動の柱となるのは、被災地各地で取り組まれている伝承活動の連携・伝承活動の企画・共有の伝承の担い手となる人材の育成」だ。

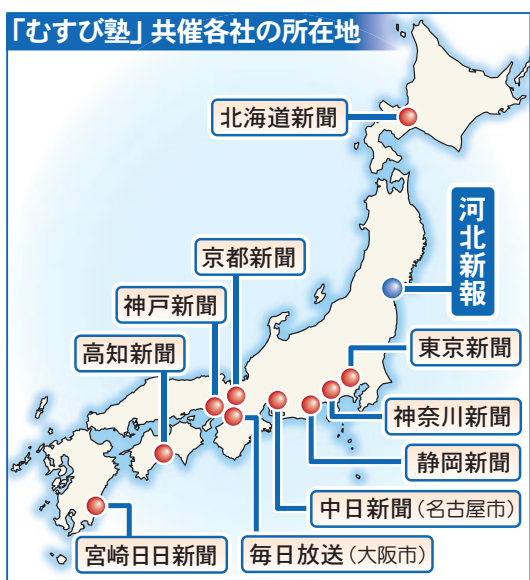
特に次世代へ震災を語り継いでいくため、若い世代を活動の輪に積極的に組み込む取組みやメンバーが被災地を訪れ学びを深める活動には力を入れる。

311メディアネット いのちと地域を守る

東日本大震災から8年。被災地はなお復興途上にあるが、一方で風化が加速し、震災伝承が課題となっている。「いのちと地域を守る」という誓いを共有する地方紙などの連携の輪「311メディアネット」は、災害の記録・記憶を伝え継ぐという防災の原点に立ち返り、地元であった大災害や震災を「わがこと」として、伝え継ぐ活動をしている個人やグループの姿と意見を合同で報告する。

311メディアネット

河北新報社が展開する防災巡回ワークショップ「むすび塾」を共催した全国の地方紙、放送局(地図参照)が参加するネットワーク。「共催のつながりを生かし、連携して防災機運を盛り上げよう」と各社が持ち寄った報告を基に震災発生日前後に共通タイトルの特集や連載、番組を組む。ことしが2回目。



シンポジウム「響き合うために」仙台・23日

防災啓発の方策考える

東日本大震災を始め、日本各地で頻発する自然災害に対する防災伝承の在り方を考えようと、3・11メモリアルネットワークは、23日、宮城県と共催で、伝承シンポジウム「響き合うために」を仙台市青葉区の県庁2階講堂で開催する。

特別講演の講師には、1854年の安政南海地震津波の際、稲むらに火を付け津波から住民を救った浜口梧陵を顕彰する「稲むらの火の館」(和歌山県広川町)の崎山光一館長を招く。

パネル討論では、崎山館長、宮古観光文化交流協会の学ぶ防災力5。

伊豆元田久美さん、いわき市の温泉旅館「古滝屋」当主の里見喜生さん、野蒜まちづくり協議会副会長の山縣嘉恵さんの4人が、自然災害を語り継ぐ大切さを議論する。被災地で防災啓発に取り組む若者たちのトークもある。

13時から。参加費無料。連絡先は3・11メモリアルネットワーク事務局090(9407)3125。

縦横連携で風化防止へ

防災・教室 北條哲広

東日本大震災の伝承活動は被災各地の奮闘こそあれ、地域を超えた横軸連携はこれからの部分が多い。メモリアルネットワークの活動はこの横軸連携に加え、時間経過による風化も防ぐための縦軸強化にもつながるだろう。

過去に学び判断力向上を

東北大災害科学国際研究所長 今村 文彦さん



近年の被災状況からその特長を見ると、過去の繰り返しの姿もあるが過去に経験のない新しい災害像も浮かび上がってくる。災害は忘れた頃に発生するとは限らない実態がある。

しかしながら、地域が持つ過去の歴史や自然や社会の環境を知ることは事前に

備えるためには不可欠であり、近年の他地域の被害と比較し取り組みを参考にしながら将来をイメージすることが必要である。

今の社会は多様化し複雑化している。そこで何が起きるのか、要支援者や外国人観光客の方々も含めて考えたい。さら

に、現場での災害対応のためには、学んで得た知識を実践すること、さらに現場での判断力を向上することが大切であり、地域での連携した避難訓練などはまさに今後も重要な取り組みになると考える。

最後に、防災や減災を「わがこと」にするためには、過去の経験や教訓を一人称として捉え主体的に考え、受けるだけでなく自ら発信していく、また世代を乗り越えて後世に伝承していくという姿勢が求められている。ここに語り部の意義や役割があり、国際的にその活動が広がっていくことは歓迎したい。